

都 鳥



第 7 号

2010年 5 月 版

題字「都鳥」は 伊藤幸子の筆

嬉しい変化

...都鳥からのメッセージ...

「都鳥」の基本的な役割である、同期生間の消息の伝達・交換は最初から歓迎されていましたが、新しい書き手の輪が広がっていくにつれ、毎号楽しみに待っていて下さる読者が目に見えて増えてきました。特に第6号からは、四日市在住の方々に編集に加わって頂いたことで、さらに読者および投稿者の数が増えることになりました。

あちこちにお住まいの友人達の関心や活動状況を知る事が、読者に周囲の世界に対する新しい目を開かせ、ともすれば眠り込もうとする精神を揺すぶって積極的な活動へと振り向けてくれる事も、先に触れましたように既に気がついていました。今回は、上記の2点に加えて、それに関連するもう一つの嬉しい事をお話ししようと思います。

最初のうちは、投稿をお願いすると、「今まで書いた事がないから」とか、「文章を書くのは苦手だから」という理由で、執筆を尻込みなさる方がままありました。第2号でしたか、このメッセージで、他人の書いた物を読むのは消費者の立場、自分が書くのは生産者の立場、皆さん是非生産者になって下さいと、大いに激励したつもりでおりましたところ、まだ何も言わないうちから、「私は消費者でいいワ」と予防線を張られてしまい、「しまった、逆効果だったか」と苦笑した事がありました。ところが皆さん一度お書きになると、それがきっかけで弾みがつき、今度はあれを書こう、これも書こうという意欲が湧いてくるものと見えまして、今では後ろから私の背中をドン！と突いて、「あなた、何をボンヤリしてるの、ホラ見て、私こんな文章を書いてきたのよ、早く読んで、きれいに印刷して頂戴ナ」と言わんばかりの張り切りよう、「変われば変わるものだなあ」とつくづく感心しつつ、いそいそと編集に取りかかるこのごろでございます。

(伊藤 幸子記)

安藤 雍子 (津田)

名古屋市緑区鳴子町 5-97

私の四日市

私にとっての四日市はいつでも犬との思い出で一杯です。高二から四年間過ごした四日市(富田)は海岸も近く、たんぼも広がり自然が豊かでした。当時、若いドーベルマンのジョーを飼っていました。学校の南側の桜並木の道は車どころか人っ子一人通らず、犬の散歩には最適でした。思いっきり走らせたり、隠れんぼしたりして楽しんだものでした。

ある日、海岸に連れて行くと、初めて見る波におっかなびっくり、でも一度波をかぶると何でもないことがわかり、はしやぎまわりました。海で遊んだ日の後のことです。桜並木の散歩では水は平気という顔で、道沿いの小川の堰におりて行き、足をびたびたさせて得意げにしていますが、跳びはねたとたん、深みにどぶんとはまり沈んでしまいました。溺れそうになって犬掻きしていたのをあわてて引き上げたのでした。

また別の日に富田の街を散歩していると、大きな犬を連れた人とすれ違いました。ジョーはあっという間にその犬に跳びかかっていきましたが、その犬は黙って首を一振りしただけで、ジョーの喉首に噛み付いていたのです。犬を連れていた男の方は「それは無理だわ、この犬は土佐犬の闘犬でそれも横綱だよ」と言いながらジョーを離してくれました。

別の日、庭の木戸のそばで涙ぐんでいた私に寄り添ってそっと頬をなめてくれたこともありました。

私とジョーとの思い出は四日市という舞台に恵まれて、より印象深いものになったのです。

石橋 幹子 (重盛)

三重郡川越町豊田 636

病と共に

平成16年10月、机に向かって読書していると、突然左目が真っ暗になり、ゴミが入ったのかと洗眼してみても未だ真っ暗で眼科を受診しました。医師は熟慮の末、「難病の疑いがあるので総合病院を紹介します」との事、早速転院して精検を受けた所、「夕焼けのような眼底で、小さな雪の玉が途中に舞っていますよ」と言われ、眼底の血管造影を初め沢山の検査の結果、ぶどう膜炎(サルコイドーシス)との診断で、「難病ですがこれから治療を始めますので、しっかりした気持ちで頑張ってください」と、熟練のテキパキした女医に励まされて治療を始めました。薬の副作用は、吐き気、めまい、息切れ、むくみ等があり、続けるうちにムーンフェイスになり、体全体もむくんで指輪も嵌らなくなってしまいました。

平成19年1月には進行して来た白内障の手術を左目だけ行い、幸い眼底には影響が無く、左目が少しずつ見えるようになり、大体の日常生活はこなせるようになりました。とは言っても、右目は白内障が進行中で眼底の変化を見ながら手術のタイミングを決める状況で、外出時には駅の料金表で苦勞し、いつも日常のメガネと共に虫メガネも持ち歩いています。

70歳のころには思いもしなかった目の病気、「失明したらどうしよう」と不安もあり、何でも見たい気持ちは強いのですが、ぼんやりとして、特に薄いグレイと紫の区別がつきません。不自由ではありますがこれからの人生、治療と付き合いながらゆっくりと生きていこうと思っ

ています。

伊藤 喜久雄

三重郡川越町高松 105-1

カメラと私

私は今、趣味で風景写真を撮って楽しんでいますが、今はカメラと言えばデジタルカメラ、フィルムカメラは店頭から姿を消してしまった昨今です。私の所属するカメラクラブでもフィルムカメラは少数派になってしまいました。私も 2004 年頃からフィルムと平行してデジタル一眼を使っていましたが 2008 年から重点をデジタルカメラに移しました。

今年は 9 回目のスイスアルプス撮影旅行を計画しています。退職記念にスイス旅行をしたとき圧倒的なアルプスの風景に魅せられて度々撮影旅行をしましたが、まだまだ撮り足りないところがあります。今まではフィルムで撮影してきましたが、今度はデジタル一眼で撮ろうかと考えております。メリットはその場で確認でき失敗を防げる事、空港の荷物検査で X 線を気にしなくて良い事、フィルム数十本の荷物が減ることなどですが、デジタルの弱点はメディアカードのパンク。まだまだフィルムの良いところがあり悩んでいるところです。

ここで四高を卒業して間もなくの頃の一寸したエピソードを紹介しましょう。友人の T 君が「遠くから友達が来たので記念写真を撮りたいのでカメラを貸してほしい」と言ってきた。丁度フィルムが半分ほど残っていたカメラを「絞りは F8、シャッタースピードは 1/100」などと説明して渡したところ、しばらくして T 君が「喜久雄、写ってないで！」と言ってきた。「現像もしてないのに・・・」と

訝る私の前に「これっ」と言ってフィルム広げて見せたのである。唾然とする私に更に「なっ」。私の撮った写真も一緒にパー。忘れることのない話です。



マッターホルン遠望



朝焼けのドーム峰

伊藤 貴美子 (門脇)

四日市市前田町 25-17

海外旅行雑感

教師時代の 41 歳の時、夏休みを利用して初めてヨーロッパへ海外研修旅行に行きました。その国の教育現場の人の話と Q&A がとても役に立ち、帰国後の教室では生徒達が目を輝かせて私の話を聞いてくれました。

退職してからは旅行がすっかり趣味になり、よく出掛けました。「何処が一番良

かった？」とよく聞かれますが、一番印象に残っていて、もう一度行きたいのが南極です。

63歳の時で、12月9日～23日にかけての15日間の旅でした。南極ではロシアの学術砕氷船にのり、1週間ほどの滞在でした。ドレーク海峡の激しい揺れに降参。とにかく机の上の物が全部落ち、引き出しも半開き、観音開きの戸棚は、留め金を掛けないと全開です。これには参りました。この波が往復4日間です。現地では1億円のフランス製ゴムボートに乗り、宿代わりの船から島々に上陸です。その神秘的な景色の素晴らしかったこと！空と海の青さ、透明な氷と白い雪、太陽による絶妙な色の変化、まるで極楽か竜宮城でした。その名もパラダイス湾、ルーメル海峡、ピーターマン島と言い、デセプション島の海岸には温泉もありました。

この人類共有財産である南極を、領有宣言をして、子供まで生まれている国があるとのこと。美しい清らかな南極大陸が、人類のエゴで汚されない事を願うばかりです。

伊藤 幸子

東京都江戸川区中葛西 5-2-7-1005

武蔵野の風景（1）

7年にわたる滞在を切り上げて、疎開先の四日市から帰京して以来、私は小平市、東村山市など、都の西北の郊外に住む事が多かった。

玉川上水のほとりに住み始めた1960年代初頭の小平は、武蔵野の面影を色濃く留めた全くの田園地帯であった。武蔵野の特徴は、樹齢何十年を越す天を衝くばかりの樺の木立と、至る所に見られる

人懐かしげな雑木林、それにどこまでも続く豊かな草原であった。

春先には、薄紫のスミレがびっしりと玉川上水の土手を埋め、朱色の草ボケの花が点々と灯りのようにそれを彩って咲く。広々と連なる畑の空き地では、タンポポや春リンドウが太陽に向かって無邪気に微笑み、畑一枚分程の濃紫のスミレの群落がそよ風に揺れていたりした。犬を連れて野原を歩くと、草むらで餌をついばんでいたコジュケイの群れが、けたたましい声を上げて飛び立ち、鼻息を荒くしている犬から離れた所で、さも恨めしげにいつまでも鳴いているのだった。

蜘蛛の糸ほどに細い雨脚が、乳白色の靄を生じて樹々の緑を被い尽くす、梅雨期のほの暗い空が晴れると、豪快な夕立と雷でアクセントをつけながら、爽やかな田園の夏の幕が開く。

それが、八月も末にかかると、情感に満ちた夏の仕上げのような深い茜色で西の空を染める夕焼けと、何時の間にか盛んにすだき始めた草むらの虫の音が、早くも秋の到来を告げるのである。

岩脇 昌生

西宮市殿山町 5-26

喜寿で迎えた初日の出

1月に喜寿となる平成22年元日、昭和49年から36年間継続している初日の出を迎えるために西宮の北西に位置する甲（カブト）山に登りました。

甲山は、標高309メートルとはいえ頂への道は狭く急峻、うっそうと茂る木々の中を、初日の出を見る人々が列をなしてジグザグに登って行く後ろに続き、懐中電灯で足元を照らしながら何回も途中休憩して登りましたが、年々体力が衰

えていることを実感しました。

大晦日の遅くまでお節料理の準備で疲れ果て寝息をたてる女房が目覚めないよう静かに身支度、4時半過ぎに家を出て電車で約5分、甲山最寄り駅まで乗車、山の麓にある古寺、神呪寺(カンノウジ)まで約40分、坂道をゆっくり歩き、お寺で誓願してひと休み、甲山を目指しました。

遥かに望む生駒山からの初日の出は、厚い雲に遮られ予定時刻より20分遅れ7時27分、お日様が山や海、阪神間の街並みを包み込むように大きく、オレンジ色に照らす様子は圧巻、山頂は多くの人々の歓喜に包まれ初日の出を迎えました。ご来光を見て、素晴らしい一年になるはずだとの思いで遥拝後一人お酒で乾杯、帰宅後厳しい寒風を受けて冷え切った体を温めるため風呂に飛び込みました。

今年一年の願いを籠めて静かな気持ちで頭を垂れるのは良いものです。心が清められる思いがします。健やかで心穏やかな毎を送り、特に多少なりとも脂肪を蓄積し体重を増やすことが喫緊の課題のようです。又、笑顔を忘れないよう心掛け、友人との交流を一層深め、趣味を楽しみ素晴らしい年にしたいものです。

春日 一彦

名古屋市西区西原町 63

今ごろ? 「今」だからだ!

余命を数えて、何かしなければと思いついて、2005年に『わが街にもあった戦争と「今」— 四日市空襲六十周年に身を置(老)いて—』と題する著書を出版した。父はこの空襲で焼死した。その黒焦げの姿は、今は亡き母と私の脳裏にしかない。

六十周年が近づくとつれ、父の焼死体を母と二人で茶毘に付した光景がしきりと浮かんできた。とうとう下手なスケッチでこの悲惨な姿を表現しようとするまでになり、それが出版の動機となった。

マスコミでも紹介されたので、出版後しばらくは、四日市だけでなく他所でも「語り部」として講演を頼まれた。

それからもう5年近くが経過して、やや落ち着いたかと思ったら、また最近、著書の注文が寄せられたり講演を頼まれたりするのである。今ごろ、何故と不思議に思っていたが、「今」だからだ、と謎が解けた。

今年は、終戦後65年を数え、また改正安保条約署名50年目を迎える。しかし、米軍の再編計画にしっかりと組み込まれて、いまだに日本国内には多くの米軍基地が置かれ、地球規模での共同行動をさせられようとしている。われわれは、一見平和な生活を送っているようであるが、それは薄氷を踏むに似ているように思える。

21世紀こそは、平和な世界、美しい地球を子孫に残してやらなければならない。そのためには、あの忌まわしい戦争を地上からなくし、巨額の軍事費を生活向上のために使うべきではないのか。

最後に、私をドキッとさせた言葉の一つを紹介しておきたい: 「戦争を防ぐには、戦争の実態を知らねばならない。…今がまさに〈知っているなら伝えよ、知らないなら学べ〉の正念場だと感じる。」(早乙女勝元)



木村達也

横浜市鶴見区東寺尾 5-5-43-203

心残りな5ドルのモーゼ

昭和44年、この年は仕事で二度イタリアへ出向いた。一度目は5月から6月にかけて約3週間、二度目は9月末からクリスマス迄滞在した。

当時のソヴィエト連邦が領空上の通過を許さず、従ってヨーロッパへの直行便が無かったので南回りで出かけた。先ず香港から始まり途中幾度も寄航し、ローマまで25時間を超える本当に草臥れる旅であった。

給油寄航のうち、テル・アヴィヴで深夜に1時間ほど空港ビル内で過ごした。そんな時間にも拘らず売店が開いていて、そこで木彫りのモーゼ像が目にとまった。高さ15センチ位の一刀彫のようなもので5ドルの値札がついていた。大変気に入って買ったかったが、仕事がこれからであり荷物は増やすまいと思いつめた。帰りはパリへ寄ったので北極ルートとなり縁無しだった。

さて9月の末、再び往きと同じルートで飛んだ。今度は買おうと決めていたので張り切って空港へ降り立ったところ何と空港免税店は改装中でお休み！ 帰りはドイツへ寄って再び北極ルート、結局手に入らずに終わった。

5ドルといってもレートが360円時代で貨幣価値も高く今なら5～6千円位のものであろう。最初の5ドルを決断し損なった結果、木彫りのモーゼは心の中に残るのみとなった。日～欧間直行の今では懐かしい思い出である。

小島紀子 (伍島)

小平市鈴木町 2-865

身辺雑言

幸便を得た日草紅葉地に燃ゆる
慶びに二十年めの貴腐ワイン
孫娘の婚約を祝って。
娘の結婚の時も貴腐ワインでした。

庭の石つやめいてくる秋霖の候
寒天に白玉椿の白凍みる
対向車のライトを割いて冬の雨
弦弾く音に似て霰木の葉うつ
紅き色紅きままなる落椿
水仙のゆらぎ映して風の海
季の移ろいを感じたままに。

ご最良の選手のメダル春一番
大輔くんのステップ万歳！

“晶子”のうたくり返しくり返し雛の宵
私の好きな与謝野晶子の短歌です。

舗道奔る花吹雪追う若い声
木も人も春まん中のひとこまです。

後藤隆三

川崎市多摩区三田 3-1-2-6-206

海と私 (5)

岸壁の母

私は、昭和32年から3年間第八管区海上保安本部(舞鶴)に勤務していました。当時シベリア、樺太、中国からの引揚げが盛んに行われ、2～3ヶ月に1隻の割合で引揚げ船が舞鶴港(東舞鶴)に入港していました。1隻に1,000人位が乗船していたと思います。引揚者は沖で交通船に乗り換え、平(たいら)栈橋から上陸して、引揚援護寮に入り数日かけて入国の手続きなどを行ないました。こ

の後思い思いの帰還地に向かいました。私は引揚者から各地の事情を聞くのが仕事でした。

この頃、引揚げ船が入港するたびに、平栈橋にたたずむ小柄な婦人の姿があり、“岸壁の母”と呼ばれていました。寮のスピーカーからは菊池章子の歌う「岸壁の母」がずっと流れていました。いつしか婦人の姿が見られなくなりましたが、息子さんは日本の土を踏むことはなかったそうです。後日この歌を二葉百合子が歌ってヒットしました。

私はこの歌を聞くたびに、栈橋にたたずむ婦人の姿が思い出されます。

坂田 かよ子（芦田）

四日市市桜花台 2-17-2

たくさんのありがとうを

「アルツハイマー型認知症です」...、夫の MRI 画像を見ながら診断を下す先生の口調は、「風邪ですね。お薬出しておきましょう。」というのと同じに聞こえました。けれどももちろん、その後続く言葉は、「暖かくしてゆっくり休んで下さい。」でもなければ、「一週間もすればよくなりますよ。」でもありませんでした。

「介護に当たれるご家族は何人いますか？これからが大変ですよ。覚悟して下さいね。」...そう言われても、その時はまだ実感がありませんでした。夫の状態は落ち着いていて、ちょっと様子に違和感がある、といった程度のものでしたし、むしろ、命に関わる病気でなくて良かったと、ほっとした気持ちにさえなったものです。

けれど現実はそのような生易しいものではありませんでした。それからの3年間は、かつて想像もしたことがないような出来

事の連続です。坂を転がるように悪くなる症状、慣れない介護に悪銭苦闘、空かない特養、先の見えない不安、遂には誤嚥による肺炎で入院、続く高熱に、一時はひと月もつかどうかとまで。

そんな中にあっても私達は恵まれていたと思います。担当のケアマネージャーの方、主治医の先生、看護師さん達...他にもたくさんの方々に助けられ、支えられてきました。おかげさまで、現在は医療療養型の専門病棟に入院することができ、きめ細かな介護を受けています。一時は命の期限を言い渡されたなど信じられないほど元気になり、最近には胃に開けた穴からの注入ではなく、口から食事をとることができるまでになりました。

手厚い、プロならではの介護を受けて『昨日できなかったことが今日できる』という小さな喜びをつみ重ねる毎日です。支えて下さった多くの方々に、そして、いつもさりげなく励ましてくれる掛け替えの無い友人たちに、たくさんのありがとうを心から伝えたいと思います。

潮崎 井久子（池田）

四日市市前田町 7-3

コーラスと私

「明るく、元気に、楽しく歌おう」をモットーにしている四日市シニアハーモニーに入団して8年になります。60歳代から80歳代まで54名（うち男声10名）平均69歳が、週1回ソプラノ、メゾソプラノ、アルト、バスで美しいハーモニーを奏でています。斉藤先生の厳しく、時には優しく褒めてやる気を持たせる指導に、皆和気あいあいと練習に励んでいます。

私も年相応に足腰が痛く、腰部脊柱管

狭窄症と診断され、演奏会で2時間余り立って歌う事が出来ないのではないかと悩みましたが、コーラスの方々、同級の伊藤貴美子さん、伊藤八重子さんに励まされ、スロートレーニングを教えてもらったり、健康食品を食するなどしているうちに、心身の健康にも良く、一人暮らしの寂しさをも和ませてくれるコーラスを続けていく元気が出てきました。

2009年9月26日、第3回演奏会が四日市文化会館で、満員の聴衆をお迎えして行われ、第一部 日本の四季、第二部 日本の民謡、第三部 組曲 生きてゆく、を歌い切りました。アンコールにアンジェラ・アキの「手紙」、この曲は私の好きな曲で、若い人へのメッセージを込め、老いても若々しい発声を心掛けて、精一杯歌いました。20曲暗譜で無事歌い終えた感動は忘れられません。

これからも友人や地域の人々との繋がりを持ちながら、2年後の演奏会を目標に、元気で心豊かな老後を送りたいと願っています。

田中 俊子 (黒松)
鎌倉市高野 18-26

俳句

まだまだ未熟な俳句ですが・・・

☆☆☆☆☆☆

蜩取り今は遠き日遠き人

不意に来る紋白蝶は誰が化身

振り向けば付かず離れず父子草

禅僧の袖の透かしや蝉時雨

落蝉は風に吹かれて自在なり

色褪せていとおしくなる秋簾

大福の豆の歯ごたえ秋深し

雨脚の強くなりけり鶉の声

風に身をまかせて行けり冬の峰

冬椿悲しきほどに今日も咲く

晦日や四条に座る占星師

売られてゆく子牛見送る雪の道

☆☆☆☆☆☆

生川 東

四日市市富田 3-13-9

四高 今昔

数年前、二七会が長島温泉で行われた時、神戸在住の岩脇昌生さんが富田で途中下車して四高に行ってきたと聞いてみました。四高の現在について知りたいと思ってみえる方もあると思います。

現在の四高は周囲を金網の塀で囲われ、用なく入ることは出来ません。校舎はすべて建てかえられました。十四川堤防との間にあった田んぼが埋めたてられ、運動場が広くなりました。サッカーのシュートを外して、蛭に血を吸われながらボールを拾いに行ったのは遠い昔の話です。野球以外の球技は今もライトのうしろで練習していますが、余裕はあるようです。テニスコート、プールもあります。(プールは外からみえません)

昨年、近鉄富田駅西口駅舎が新しくなり、四高との間にロータリーが出来て、東名阪四日市インター近くの四日市大学へのバスが発着しています。駅と四高との間にあった民家はすべて移転し、運動場部分は道をはさんで線路と接していま

す。昭和45年に三岐鉄道が近鉄富田駅に接続して、通学に富田の町の中を歩かなくてもよくなりました。東口の中央通りはシャッター街と化し、四高周辺には中小の学習塾が目立ちます。

このように今の生徒は整備された環境の中で勉強に部活にとはげんでいるようです。戦後の混乱と学制に翻弄された我々とは雲泥の差です。それだけに在学時の思い出、感慨が深いのではないでしょう。



よく見ると駅舎が鯨になっています

西脇 基夫
藤沢市湘南台 6-55-1

友

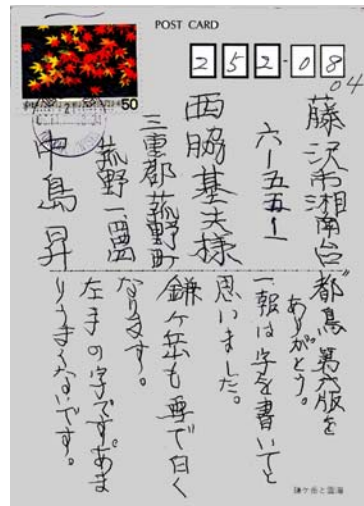
しばらく音信がなかった中島昇君から“はがき”が届いた。彼とは暁中学で知り合って以来の友である。しかし、高校を卒業してからは音信が途絶えてしまった。再会できたのは中学卒業後50年の記念行事での同窓会であった。

以来、文通が始まり、都鳥の創刊号には「藍綬褒章と前立腺ガン」という原稿を送ってくれた。ところが翌年、脳梗塞で倒れてしまい、再び音信不通となってしまう。毎回、各号の都鳥を送り届け

ていたのだが応答はなく心配していた。届いた便りを見て、「おお、元気だ、よかった、よかった」と喜んで読みながら、最後の文章のところで目が釘付けになった。次第に目頭が熱くなってきた。

「左手の字です。あまりうまくないです」とある。とんでもない、それと気付かずに読んでいた。感心感服。短い文章だが、こんなに感動を覚える手紙を貰ったのは生涯はじめての経験である。

頂いたはがき、本人の了解を得て添付します。彼の健康回復に乾杯しよう。「昔の友はありやなしやと」。



服部 幸市
四日市市諏訪町 12-5

我が家の歴史 (1)
--- 宝屋の乾坤一擲の時期 ---

昭和26年、私は四日市高校第3学年に在学し、進学コースで医師を目標に頑張っておりましたが、経済的な事情もあり、やむなく商業界に進んで行くことになりました。

我が家は商業資本家として6代続き、

四日市の中心東海道部分で順調に進んでおりました。軍国時代に入った時、四日市市の中心部一号線の第一期工事を陸軍の発案が直撃しました。約 400 坪の土地家屋が十分の一になり、それも完成の喜びも束の間、四日市空襲で灰燼と化し戦後は統制令で戦前の商業もできず、父は戦中戦後の飢餓の時代を通して、素人稼業に悪戦苦闘の連続でした。

昔気質の父の方針で、四日市高校卒業と同時に名古屋市老舗の本店に丁稚奉公にやられ、天と地の違いの生活環境に四苦八苦した末商業界に入り、家業に専心して他人様の 3 倍以上働き続け、やっと戦前の宝屋の資産を謳歌するまでに発展することができました。

平成元年には四日市ビルディング協会の会長として、同志 26 人の寄付金を得て社会福祉法人ユートピアを設立し、四日市の中心的役割をつとめながら、現在ケアハウス、デイサービス、ショートサービス、福祉事務所を併用して、トータルで 11 億円にて責任を果たしております。理事の方は一切無報酬で現在も続けております。

浜本 ひさみ (羽場)

小金井市貫井南町 1-11-7

ルーツを訪ねて (終)

平成 22 年 1 月、墓参を兼ねルーツを求めて金沢を訪れた。先祖を探れば延々とあるのに、現実には冷たい。金沢市役所戸籍係を期待を持って訪問したが、叶えられたのはほんの一部に過ぎない。明治 40 年以前の記録が廃棄処分させられたとかで、知り得たのは僅かであった。祖母の兄が戸主となり、30 歳で死亡後その母が戸主となったこと、娘である祖母の

家庭に同居しそこで死を迎え、祖父が死亡の届出をしたこと等である。これは彼らの生きた証の発見であった。

一方、祖母の母の妹の嫁ぎ先 A 家については、私共が直系でないことを理由に戸籍の入手は果たされずに終わった。菩提寺に訊くのがよいと言われ、その寺に件のことを求めたが、個人情報に触れるとのことで叶わず、代わりに子孫の住所と電話番号を知らされた。未知の人ではあったが電話をかけ、現戸主の兄弟まで知る事ができた。

他方祖母の父の妹の嫁ぎ先 S 家については、金沢市立近世史料館と菩提寺 M 寺のご協力のおかげで、得るものがあつた。金沢尾山神社にその顕彰碑がある。個人情報の方がもう少し緩やかならばと惜しまれる。まだまだ知りたいことはありこれは家系の一部に過ぎないが、初期の目的は達せられた。制限の多い中で、最初に訪問した K 寺で見せて頂いた過去帳と位牌の記録が役立つことは言うまでもない。完全とは言えないものの、家系図を作る事ができたことを感謝し、一連の作業の終結を迎えられたことを喜びとしよう。

福島 泰子 (八島)

四日市市笹川 8-45-11-105

ボランティアを続けて

私は 1987 年に ”はなの会“を結成して、老人福祉施設でボランティアを始めました。ここでお会いした高校の時の先生が、生徒の名前や授業のことはとても鮮やかに覚えていて話して下さるのに、他の事はすぐ忘れてしまわれるということがあって悲しい思いをしたことがありました。

この施設でのボランティアは介護保険

制度の導入でやりにくくなって中止し、その後、精神障害者が社会復帰するためのデイケアのボランティア“ハートフル会”を作り、今日まで続けて参りました。人間関係に悩み社会生活に疲れて病んだ心のケアはなかなか大変で時間もかかり、早い時期の治療が必要だとつくづく思いました。

現在は、“傾聴ボランティア”という、一人暮らしや施設で孤独になっている人たちに、心から寄り添って話を聴くという活動を行っています。自分も高齢者となり、昔のことを話せる年代として喜んでいただけるので、これは私に合っているかもしれないと励んでいます。だんだん話すこともできなくなっていく人たちに接すると、何とも言えない空しさと淋しさを感じます。

長い間にはいろいろな事に遭遇しましたが、ボランティアは自分にとっても良い勉強になるので、まだ続けていられることに感謝して過ごす毎日です。

水谷 ひで (田中)

四日市市 中川原 1-10-11

ペスト流行 in 四日市

昨年は春以来新型インフルエンザの流行で大騒ぎしましたが、それで思い出したのが、亡母がよく話していた 1916 年(大正 5 年)の四日市でのペストの流行です。

資料によるとインド方面からの輸入綿花に付着して菌が侵入したようです。大正 5 年 10 月 13 日紡績会社関係者 5 人がペストと診断され、以後わずか 2 ヶ月ほどの間に感染者 61 人に達し、その大半が発病から数日のうちに死亡しました。県や市も急遽対策に取り組み多くの医師

や技師が集められ、検疫、隔離、消毒、蚤や鼠の駆除に全力を尽くしたようで、北里博士も来泗されたとの新聞記事も載っています。

感染者の発生した工場を中心とする地域を亜鉛板で囲い、交通を遮断して大消毒を行うと同時に、その地域の住民は全員隔離するため一時は小学校に集められました。その後一週間ほどの間に急ピッチで避難所を建築しそこに移して収容、また、鼠の駆除のためには薬剤散布だけでなく、市民に鼠の捕獲を奨励し、捕獲した鼠を最初は一匹 2 銭、やがては 10 銭まで引き上げ約 6 万匹を買い上げました。防疫のための臨時経費として、当時の一般会計総額の 52%に当たる 10 万円余の追加補正をしました。

こうした様々な対策によって翌年にも 2 名の死者があったものの、5 月以降は全く感染者を出さずに終息したのです。この間に 63 名が発病し、56 名が死亡しました。

このペスト騒動の間四日市は「海陸共に交通全く途絶し、市内は寂寞として日中といえども街人影を見ざる」という状態で、商工業に及ぼした影響は多大でした。特に四日市港に入っていた船舶が四日市を避けて名古屋港に入港するようになり、やがて四日市港が名古屋港に追い抜かれる一因になったと言われています。(四日市史及び四日市市の歩み参照)

水野 とよ子 (山田)

四日市市 羽津山町 9-5

浄玻璃の鏡

小学校に入って間もなくの頃、小柄な上級生に高い鉄棒に飛びつかせてくれと何度も言われ、仕方なく体を引き上げた。

とたんに悲鳴が響き彼女の肩が脱臼した。脱臼はすぐ治り大事には至らなかったが、七十年も経つのに私は忘れないで居る。生まれて初めて嘘を吐かれたからだ。執拗に頼んでおきながら、嫌だったのに無理矢理されたと全く逆な事を彼女が言ったのだ。叱られた記憶が無いから周りの大人達にはすぐ見破られた嘘だったと思うが、私は悔し泣きの中で、祖母の部屋で見た地獄絵を思い出していた。

三年生の工作の授業で張り子のダルマを作った。完成間近になって私の作品が紛失した。私のダルマだと思ふ作品を、他の子が自分のだと言い張るのだ。下張りに医者父からもらった反古紙を使っていた事であっけなく嘘は見破られた。この事件で証拠という言葉に出会った私は、探偵小説が大好きになっていった。少女の日の二つの出来事がトラウマになる事も無く、嘘をまことに変えましょと天満宮の鶯(ウソ)かえ神事に参加し、嘘も方便などと言いながら何時の間にか喜寿を迎えた。閻魔王庁で生前の善悪が映し出されると言う恐ろしい「浄玻璃の鏡」の前に立つのもそう遠い日ではない。その日まで嘘を吐かず、吐かれず、平穏な老いの日々を楽しみたい。

渡邊 喜久子 (後藤)

三重郡川越町高松 789

俳人山口 誓子

私の住む川越町の隣町四日市市天ヶ須賀に、俳人山口誓子が住んでいた家がある。その家の塀の北西の角に誓子の句碑が立っている。

かの雪嶺信濃の国の遠さもて 誓子

誓子は病氣療養のため昭和16年よ

り富田の海岸に転地、21年には天ヶ須賀に転居する。この地で『天狼』は創刊されている。誓子は体調の良い日には近くを散策して句作に励んだ。

夕焼けて西の十万億土透く 誓子

この句は朝明川の河口近くでの作である。川上の鈴鹿山脈の落ち込んだ広い空が夕焼けで紅く、西の方は遠くまで透いて見えた、私はそこに十万億土を見た、人間は死ねばそこへ行くのである、その十万億土をありありと見た、と自解されている。高野山の奥の院近くにこの句碑が立てられている。他にも、「土堤をそれ枯野の犬となりにけり」、「行く雁の啼くとき宙の感ぜられ」等、ここで詠まれた句は多い。

誓子は、富田、天ヶ須賀、鼓ヶ浦と、伊勢の海岸で戦中戦後の厳しい13年間を過ごした。夫人波津女が一緒だった。波津女も誓子を看取りながら俳句を作っていた。

愛情は泉の如し毛糸編む 波津女
毛糸編み来世も夫にかく編まん 同

この辺りも随分家や工場が増え様子は変わったが、西に連なる鈴鹿の山々、朝明の川の流れは変わらない。



渡邊 千恵子 (服部)
春日井市藤山台 5-4-8

絆

平成8年2月、夫はスキルス胃癌で、8ヶ月の入院後逝ってしまいました。まだ気持ちの落ち込んでいたころ、四高のお友達が少人数の集まりにさり気なくお誘いくださったことは忘れられません。また、修学旅行50周年記念箱根旅行は楽しい企画でした。半世紀ぶりにお会いした方でも、じんわりと記憶は甦りどんどん思い出の糸がたぐりよせられてまいました。それをきっかけに、度々東京や関西へもお招きいただき、同期の皆様と在校時代より更に広く親しく交流させていただいたことは私にはとても有り難い事でした。幹事様方に感謝です。

実家の母が存命の頃は四日市市外の故郷へ通うのに、名古屋から国道1号線や23号線で、のちには東名阪自動車道で四日市内を車で通り抜けていたのですが、近頃は近鉄電車でゆっくり景色を眺め、昔のことをいろいろ思い出しながら乗っていることが多くなりました。富田では、恐らく50年以上も訪れたことの無い母校を車窓より懐かしく確認して四日市駅に着きます。わが故郷も今は四日市市になり、両親・兄も鬼籍に入りました。今日2月20日は亡夫の15回忌にあたりつい感傷的になりました。おゆるし下さい。今年は幸い足の痛みも快復し、四校27会の皆様にお会いするのを何よりの楽しみにしております。



浜口 博彦
横浜市旭区中希望が丘 75-4

趣味三昧



グロリオサ



サンダーソニア

補聴器について

武藤 康正

「都鳥」ご愛読の皆様、始めまして。私は医学部を卒業してより、耳鼻咽喉科専門医としてこの道一筋に歩んできました。50年になります。現在も現役開業医として、毎日診療に従事しております。

さて、我々は既に後期高齢者、生理的変化に伴う難聴は自覚するか否かは別にして存在しているはずです。高齢化社会の到来により、高齢であっても社会的に大いに活躍している人も多いです。難聴があってはその活躍も制限されます。外に出ない老人でも家族とコミュニケーションが取れなければ孤独になります。そこで役立つのが補聴器です。

人の話し声は音波として耳に到達します。耳介は集音の働きがありますが人では退化して機能しておりません。その音波は鼓膜を振動させ、中耳の中の三つの骨で増幅されます。ここまでが音を伝える所（伝音系）です。これを内耳で受け取り中枢に伝わり言葉として理解されます。この経路全体を感音系と言います。難聴は、この伝音系、感音系いずれに障害があっても発生しますが、両者の間には基本的な差があります。前者は音（声）を大きくしてやれば理解度は上昇しますが、後者は音を大きくしても理解度に限界があります。補聴器にもここに問題があります。

さて、補聴器ですが、諸兄弟の中には既にご使用の方もおられるかと思えますし、又『補聴器を使用して見たが言葉がはっきり聞き取れず、机の引き出しに入れたまま』という話を聞いたことはありませんか。これは明らかに購入方法、又その後の道筋に誤りがあると思われます。補聴器の必要性、機種を選定、調整、装着してからの微調整、補聴器に対する慣れが必要です。購入してそれで終わりと言うものではありません。更に付け加えるならば事前に耳鼻咽喉科医の受診、アドバイスが必要です。

近年、『耳鼻科医も積極的に補聴器装用に関わっていくべきである』と言う動きが急速に進んでおります。又、販売店側にも認定補聴器技能者制度が創設され、定期的な研修を義務化しております。資格を店頭に表示している店もありますが、資格者不在の所もあるので要注意です。

高齢に伴う難聴は避けられません。感音系に障害があります。治療法もありません。眼鏡の装着には抵抗が少ないですが、補聴器の装着には外見上抵抗をもつ人が多いようです。箱形から耳内に完全に入るものまであります。高額なものもありますが、聴力と利用環境によっては、それほど高額でなくても不自由さを改善できることもあります。

最近、新聞折込に補聴器相談会などのチラシで「売らんかな」と思われるものもあります。慎重な対応をして下さい。

投稿のお願い

皆さんからの自由な投稿を歓迎します。日頃の生活を中心に、思い出、将来の計画、趣味、なんでも結構です。本文の字数で600字を超えない範囲で投稿してください。仲間同士で投稿を促し、執筆者が増え、だんだん輪が広がっていくことを期待します。遠くへ出かけることが億劫な人でも、これだといつも参加できますから気軽に参加して下さい。

発行は、春秋の年二回、5月と11月に発行します。締切りはそれぞれ3月末日、9月末日としますが、常時受け付けていますから、いつでも気軽に下記へお送り下さい。

橋本健二 〒510-1322 三重郡菰野町田口新田 152-2 電話；090-3480-5476
Eメール；arm.is.c@poem.ocn.ne.jp FAX；059-353-8522

松山敏彦 〒510-0956 四日市市貝家町 47 電話/FAX；059-321-0742
Eメール；t.matuyama@sky.plala.or.jp

水谷ひで 〒510-0833 四日市市中川原 1-10-21 電話/FAX；059-352-7268
Eメール；m-masahi@cty-net.ne.jp

伊藤幸子 〒134-0083 江戸川区中葛西 5-2-7-1005
Eメール；itohs@tbd.t-com.ne.jp 電話/FAX；03-3675-5982

西脇基夫 〒252-0804 藤沢市湘南台 6-55-1 電話/FAX；0466-44-0396
Eメール；nishiwaki@ruby.plala.or.jp

原稿は、手書きでも結構です。電子メールであれば編集の手間がかからなくて助かります。フォント種類、大きさは問いません。自由なスタイルでお書きください。

都鳥は<http://www5.ocn.ne.jp/~miyako>にアクセスすれば、インターネット上でいつでも閲覧できるようになっています。

注：ここで、チルダと呼ばれる記号「~」はキーボード上段、ひらがなの「へ」というキーを、英数字半角で入力します。

また、四日市高等学校の図書室、および四日市高等学校同窓会館の書棚にも置いてあります。

都鳥は、皆さまからの基金で支えられています。費用の一部に一口500円以上のご支援を頂けると有難く存じます。

ゆうちょ銀行 記号10250 番号79812901 都鳥の会

この冊子「都鳥」は、三重県立四日市
高等学校、昭和27年（1952）卒
業生で作るエッセイ集です。平成19
年（卒業後55年）に同好者が集まり
創刊しました。

印刷・出版責任者：西脇基夫